

## 野口 彰\*: 日本産蘚類の研究 (19)

## A. NOGUCHI: Notes on Japanese Musci (19)

125) 青森県八甲田山から *Didymodon obtusissimus* Broth. という蘚が発表されている。これは *Bryoerythrophyllum* 属に入られることもある。一方八甲田山に近い岩手山での Faurie 採品にもとずいて *Didymodon brachystegius* (Besch.) という種が公表されているが、陳氏 (1941) は東亜のこの仲間を取り扱った際にはこの種にふれていない。筆者はこの両種の Isotype をしらべて、その間にこれという区別点を見出せず、同種と思う。属名に *Didymodon* を使うか *Bryoerythrophyllum* を使うか問題はあろうが、次のように処置しておきたい。

***Didymodon brachystegius*** (Besch.) Broth. Engler's Nat. Pflanz. 1-3-1: 406 (1902). (Fig. 68)

Syn. *Gymnostomum brachystegium* Besch. Journ. Bot. 12: 281 (1898).

*Didymodon obtusissimus* Broth. Ofver. Finsk. Vet. Soc. Forh. 62: 9 (1920)  
-syn. nov.

*Bryoerythrophyllum obtusissimum* (Broth.) Chen, Hedwigia, 80: 252 (1941)  
-syn. nov.

Hab. Northern Japan.

126) 上記の種と同じ属のもので、新しく日本から知られるものに *Didymodon atrorubens* (Besch.) Broth. という種がある。今まで中国の陝西省、雲南省、西北ヒマラヤ方面から知られていたもので、今回新しく秩父山地で見出された。湿岩上に生育していたものである。この標本は不実で、植物体は鉄錆色、若い部分だけが緑色である。茎は長さ 10 cm もあり、葉は非常に疎生する。葉細胞は薄膜で非常に密生する乳頭があって暗い。葉の縁辺の数細胞 (3~4) 列は膜も厚く乳頭は少く、或は平滑でいくらか褐色をおびているので縁帯がはっきりする。中肋は丈夫で濃褐色を呈し、邦産のものは背方の乳頭は弱く、肋上方では平滑になっているものもあり、老成した葉でこの傾向がもっと強くなる。

***Didymodon atrorubens*** (Besch.) Broth. l. c. 405. (Fig. 68)

Syn. *Trichostomum atrorubens* Besch. Ann. Sc. Nat. Bot. 7: 55 (1892).

*Bryoerythrophyllum atrorubens* (Besch.) Chen, l. c. 262.

Hab. Honshu: Saitama pref. Chichibu, Otaki-mura, Ochigawa, Nishitani, 800~1200 m (leg. I. Nagano, no. 10893, June 27, 1958). New to Japan.

\* 熊本大学理学部. Faculty of Science, Kumamoto University, Japan.

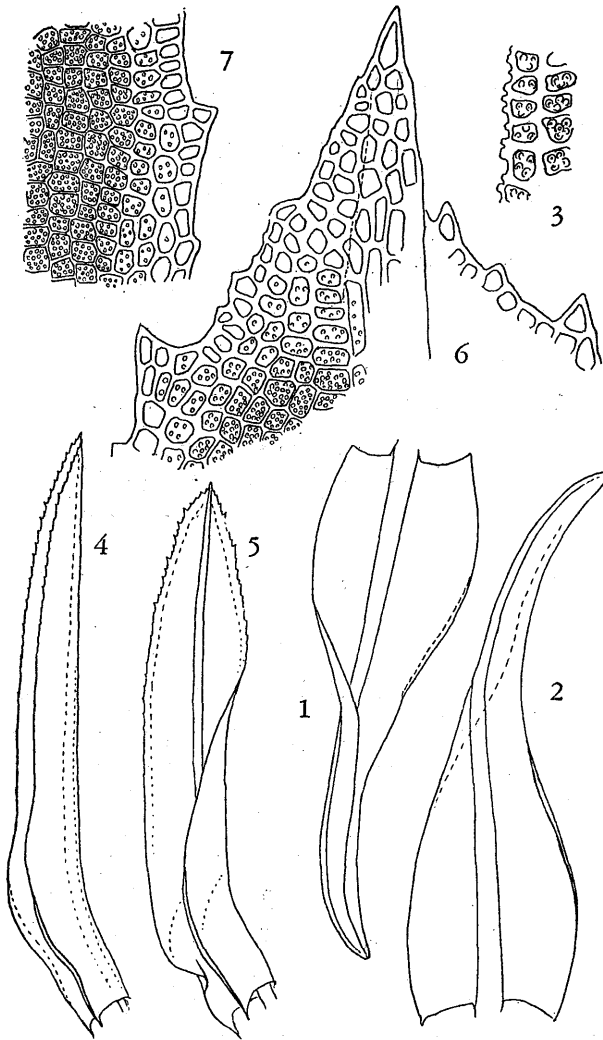


Fig. 68. *Dielymodon brachystegius* Broth. 1~3 From isotype.

*D. atrorubens* Broth. 4~7.

1, 2. Leaves  $\times 45$ . 3. Midmargin of leaf  $\times 513$ . 4, 5. Leaves  $\times 20$ . 6. Leaf apex  $\times 333$ . 7. Midmargin of leaf  $\times 333$ .

127) *Sasaokaea japonica* Broth. が *Drepanocladus japonicus* Dix. と同じものであって、後者をその正名とすることは筆者が 1939 年にのべた。近年 *Drepanocladus aomoriensis* Broth. を調べてみると、これがまた、*D. japonicus* と同一種なので、その学名は再転して *D. aomoriensis* を使わねばならないことになった。現在の産地は西は大阪府から北は青森県に亘っているが、この属のような水生蘚は変化が甚だしい。葉の着生状態は青森産の Isotype、伊勢産 *Sasaokaea japonica* の Isotype 共に疎であり、新潟、大阪産は密、東京産は中位である。葉の形も可成り違って、青森産は茎枝葉とも狭長の長楕円形、新潟、東京産は可成り広い (Fig. 69)。伊勢産は *Brotherus*<sup>1)</sup> の図では可成り広い葉が 1 枚描いてあるが、Isotype では卵状長楕円形のものも多い。これらの葉形は、このような水生蘚の変異と考えられよう。葉尖の形や葉細胞の大きさにも変異がみられる。

次に毛葉は何れの標本にも可成り存在する。毛葉のあることは、この種の著しい特徴で、筆者が *Sasaokaea* 属を *Drepanocladus* 属に含ませる際に可成り迷った点であった。それをあえてなしたのは *D. uncinatus* などにも一種の毛葉とみるべきものが少数ながら存在するからであった (*Brotherus* は Pflanzenfamilien の中で毛葉を *Drepanocladus* 属の一つの特徴として取りあげているが、この属の各種に毛葉があるとは云い難い)。この種に毛葉があることは、今日でも気にかかることであるが、それだからとて *Sasaokaea* を復活することもちうちょされるし、*Drepanocladus* の subgenus に格下げして使うか、或は従来通り抹殺するかは、この種の胞子体をみて最終的に決定されるものと思う。上述のように、学名は色々変ってきたが、この属の種は分布が広いので、同じ種が既に日本以外の地で知られているのかも知れない。

— *repanocladus aomoriensis* (Par.) Broth. Engler's Nat. Pflanz. 1-3-2: 1034 (1908). (Fig. 69)

Syn. *Hypnum aomoriense* Par. Rev. Bryol. 31: 94 (1904).

*Sasaokaea japonica* Broth. Rev. Bryol. et Lichen. n. ser. 2: 10 (1929).

*Drepanocladus japonicus* Dix. Bot. Mag. Tokyo, 50: 149 (1936), Nog. Journ. Jap. Bot. 15: 758 (1939) -syn. nov.

Musc. Jap. Exsic. ser. 3, n. 138 (1949) & ser. 10, n. 465 (1956) as *C. japonicus*.

128) *Drepanocladus hakkodensis* Card. の Isotype をしらべてみると、これは *D. fluitans* Warnst. と同一種である。もともと *D. fluitans* は広分布種であり、また多型的な種であるから *D. hakkodensis* と命名されていたものが、現在作られているこの種のどんな下級単位のものにあたるかは、更に他の機会に検討してみたい。

*Drepanocladus fluitans* (Hedw.) Warnst. Beih. Bot. Centralbl. 13: 404 (1903).

1) Rev. Bryol. et Lichen. 2, Pl. 1 (1929).

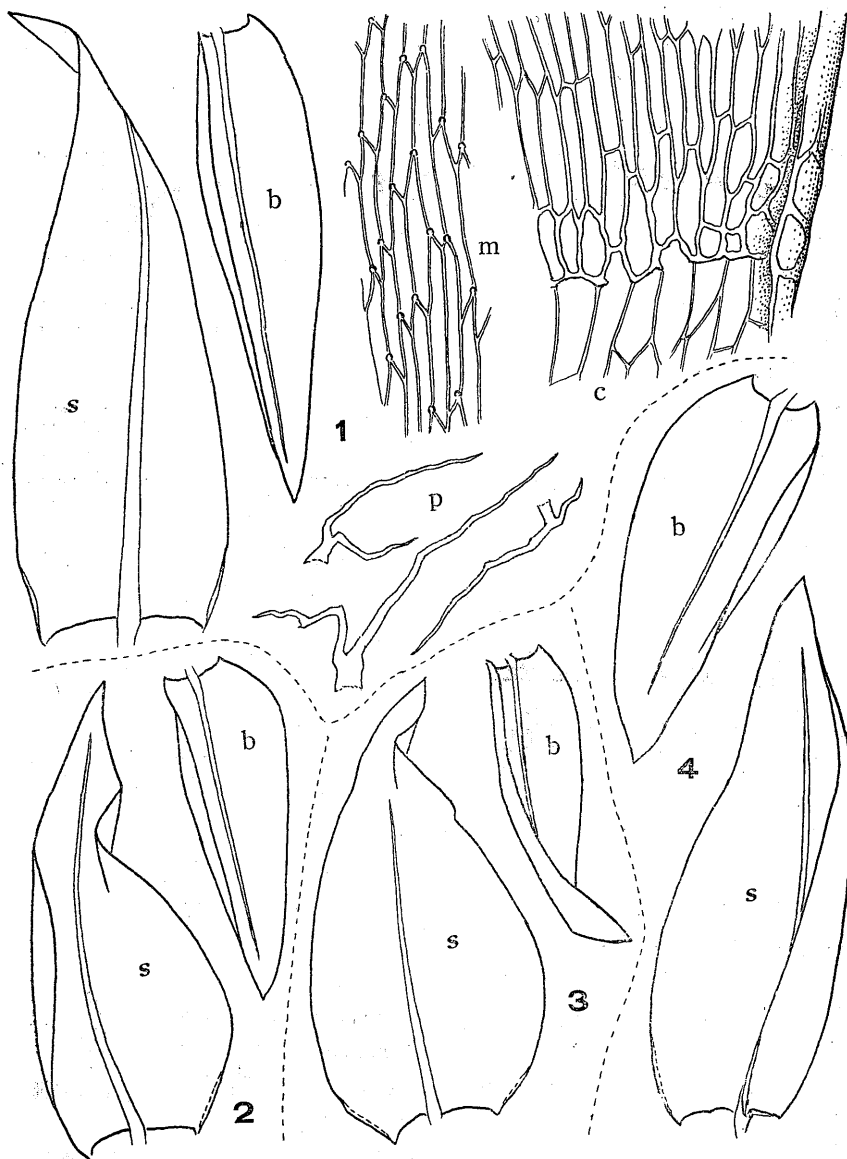


Fig. 69. *Drepanocladus aomoriensis* Broth. 1. From Aomori (isotype). 2. From Ise (isotype of *Sasaokaia japonica*). 3. From Niigata. 4. From Tokyo. b. Branch leaves  $\times 27$ . c. Basal angle of leaf  $\times 333$ . m. Cells from middle of leaf (dorsal)  $\times 513$ . p. Paraphyllia  $\times 53$ . s. Stem leaves

Syn. *Hypnum hakkodense* Besch. in sched.

*Drepanocladus hakkodensis* (Besch.) Card. Bull. Soc. Bot. Genève, 2 sér. 5: 321 (1913) -syn. nov.

Musc. Jap. Exsic. ser. 12, ns. 572~574 (1957).

129) *Eurhynchium riparioides* (Hedw.) Rich. は従来 *Platyhypnidium rusci forme* として知られていた水湿性の蘚で、非常に多型的な為に、これまで学名にも色々なものがある。日本に関係あるもので *P. schottmulleri* Fleisch. というのがあるが、これはいくらか乾燥地に生育して葉の疎生したものにつけられた名であり、また *Oxyrrhynchium sasaokae* は葉のまるくなったものの名である。また、これらの種の茎の長くなった型にも命令されていたが、それらを整理すると次のようになる。

***Eurhynchium riparioides*** (Hedw.) P. W. Richards, Ann. Bryol. 9: 135 (1936)

Syn. *Platyhypnidium rusci forme* (Neck.) Fleisch. Musc. Fl. Buit. 4: 1537 (1915~22).

*Hypnum schottmulleri* Broth. Hedwigia, 38: 242 (1899) -syn. nov.

form. ***immersum*** (Okam.) Nog. stat. nov.

Syn. *Oxyrrhynchium sasaokae* Okam. var. *immersum* Okam. Icon. Pl. Koish. 3: 61 (1916).

*O. schottmulleri* Broth. var. *perlongicladum* Okam. l. c. 63 -syn. nov.

Hab. Japan.

130) *Hylocomium cavifolium* Lac. は日本ではありふれた蘚である。これと欧米にある *H. brevirostre* との関係は十分明ではない。陽当りのよいところにあるものは大形で、葉も深く凹むので肉眼でも区別できるが、少し陰地にあるものは大きくなく、また葉の凹みも浅く皺が多くなる。しかし、それにしても欧米のものほど浅くならないので *H. cavifolium* の学名が使われてきた。今日各地のものをみると、上のような区別も困難な場合がでてくる。日本産は *H. brevirostre* の変種として取り扱っておきたい。もっとも G. Paris (1902) は屋久島産に *H. brevirostre* var. *lutschiana* Broth. et Par. の名を記しているが、これは裸名のようなものである。山地の少し高い処には細長い葉をつけた枝を多く出す型であって、筆者はこれに form. *angustifolium* Nog. の名を与えたこともあるが、これは一つの生態型と思われるので強いて区別の必要はなからう。

***Hylocomium brevirostre*** var. ***cavifolium*** (Lac.) Nog. stat. nov.

Syn. *Hylocomium cavifolium* Lac. Miquel's Prol. Fl. Japon. 373 (1867).

*H. cavifolium* f. *angustifolium* Nog. nom. nud.

Musc. Jap. Exsic. ser. 2, n. 97 (1948); ser. 4, n. 196 (1951); ser. 9, n. 427 (1955); ser. 6, n. 273 (1952) -as f. *angustifolium*.

Hab. Japan. (続く)